

# 1 哺乳類

(1-1) サドモグラ *Mogera tokudae* 〈LP〉

(1-2) サドノウサギ *Lepus brachyurus lyoni* 〈LP〉

## 【選定方法】

佐渡島には 19 種の陸産・海産哺乳類が記録されています。本州や大陸とつながった歴史がないため、越佐海峡が狭かった時代に佐渡島に侵入した祖先種からサドモグラ、サドノウサギ、サドトガリネズミなど固有種・亜種が形成されたと考えられます。これらの佐渡固有種・亜種のサドモグラ、サドノウサギに加えてコウモリ類、ハタネズミの島嶼個体群を保全すべき地域個体群 (LP) に選定しました。また、比較的個体数が多く現状では絶滅の危険は少ないが、今後の環境変化で絶滅危惧種になる可能性のあるサドトガリネズミを準絶滅危惧種に選定しています。海獣類のゼニガタアザラシは生息状況が不明なため情報不足 (DD) としました。

(執筆者：永田 尚志)

## (1-1) サドモグラ *Mogera tokudae* Kuroda, 1940

分類：動物界 脊索動物門 哺乳綱 食虫目 モグラ科

LP

◎ 佐渡市レッドリスト：地域個体群〈LP〉

○ 環境省RL：〈NT〉

○ 新潟県RL：〈NT〉

《特徴・生態》 頭胴長 149～167mm、尾長 22～28mm、後足長 19.5～22.0mm、前足長 19～22mm、体重 84～135g。本州産のエチゴモグラ (*M. etigo*) よりも小型ですが、アズマモグラ (*M. imaizumii*) に比べると大型です。尾が比較的長く、棒状で毛が疎らなのが特徴です。背面の毛色はコウベモグラ (*M. wogura*) に比べて暗く、黒茶色をしています。以前は、新潟平野に生息するエチゴモグラもサドモグラの亜種でしたが、現在では別種となっています。水田地帯に生息し、土壌が深く柔らかい環境を好みます。主にミミズやケラなどの昆虫類を食べますが、ジムカデなどの多足類や植物の種子も食べます。春季に1回繁殖し、2～6仔を出産します。

《生息状況》 佐渡島の固有種です。サドモグラは、佐渡島内に広く分布し、動植物調査では国中平野とその周辺での確認が多くなっていますが、大佐渡山地および小佐渡丘陵の脊梁部の標高の高い地域でも痕跡が発見されています。また、小木地区でも死体が拾得されています。動植物調査では12メッシュで生息確認がされています。

《保全（減少要因）》 佐渡島にしか生息していない佐渡固有種です。生息個体数は比較的多いと考えられますが、平野部の農耕地の土地改良事業や道路整備などの開発によって生息地域の分断化が進んで影響を受けている可能性があります。



サドモグラの標本（写真：永田 尚志）



動植物調査 H24-H26 より

（執筆者：永田 尚志）

## (1-2) サドノウサギ *Lepus brachyurus lyoni* Kishida, 1937

分類：動物界 脊索動物門 哺乳綱 ウサギ目 ウサギ科		<b>LP</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：地域個体群〈LP〉		
○ 環境省RL：〈NT〉	○ 新潟県RL：指定なし	

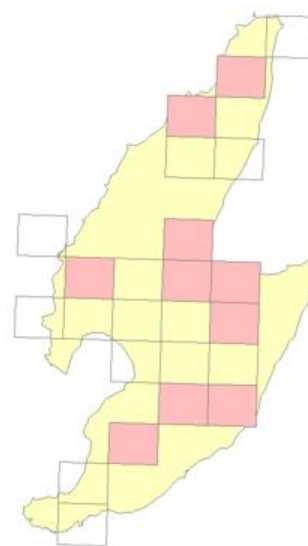
《特徴・生態》 頭胴長 45～54cm、尾長 2～5cm、後足長 12～15cm、体重 2.1～2.6kg。トウホクノウサギと同じく冬季に白い冬毛に変わりますが、夏毛は褐色で灰褐色となるトウホクノウサギと異なります。丘陵から山地にかけての草地や森林に生息します。普段は単独で生活していて、昼間は岩穴や木の洞、藪の中などで休んでいて、主に夕方と夜明け近くに活動します。草食性で、草類や木の葉などを好みますが、冬季には小枝や樹皮なども食べます。繁殖期は 3～10 月頃で、特定の繁殖形態はなく、雌は複数の雄と交配し、この間に 3～5 回出産します。妊娠期間は約 45 日で、1 産 1～4 仔、平均すると 2 仔を出産します。

《生息状況》 ニホンノウサギ (*L.brachyurus*) の亜種で、佐渡島の固有亜種です。動植物調査でサドノウサギの分布情報のほとんどが足跡や糞などのフィールドサインによるもので、大佐渡山地と小佐渡丘陵の広域に点在していました。北は鷲崎から南は羽茂平野付近まで広い地域で確認されています。動植物調査では 12 メッシュで生息確認がされています。

《保全（減少要因）》 1950 年代の拡大林業によりサドノウサギの個体数が増加し、スギの稚樹の食害が増加したため、稚樹を守るために 1960 年代に本州から移入されたテンにより個体数が減少したと考えられています。現在では、サドノウサギの生息地域にはテンが分布しているので個体数が抑えられています。サドノウサギの個体数が減少していないか注意深く見守る必要があります。



サドノウサギ（新穂瓜生屋）  
（写真：佐渡自然共生科学センター）



動植物調査 H24-H26 より

（執筆者：永田 尚志）



## 2 鳥類

- (2-1) トキ *Nipponia nippon* 〈CR〉
- (2-2) ハクガン *Anser caerulescens* 〈CR〉 \*
- (2-3) カリガネ *Anser erythropus* 〈EN〉 \*
- (2-4) ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* 〈VU〉 \*
- (2-5) オオヒシクイ *Anser fabalis middendorffii* 〈NT〉 \*
- (2-6) マガン *Anser albifrons* Scopoli 〈NT〉 \*
- (2-7) シロチドリ *Charadrius alexandrinus* 〈VU〉
- (2-8) コシャクシギ *Numenius minutus* 〈EN〉 \*
- (2-9) セイタカシギ *Himantopus himantopus* 〈VU〉 \*
- (2-10) オオソリハシシギ *Limosa lapponica* 〈VU〉 \*
- (2-11) タカブシギ *Tringa glareola* 〈VU〉 \*
- (2-12) ウミスズメ *Synthliboramphus antiquus* 〈CR〉
- (2-13) ハヤブサ *Falco peregrinus japonensis* 〈VU〉
- (2-14) コジュリン *Emberiza yessoensis yessoensis* 〈EN〉
- (2-15) サドカケス *Garrulus glandarius tokugawae* 〈LP〉
- (2-16) コルリ *Luscinia cyane* 〈NT〉

(\* : 複数種を一括して記載)

### 【選定方法】

佐渡島の鳥類としては、「動植物生息実態調査」(平成 24~26 年度)の完了時点で、354 種が知られます(旅鳥・迷鳥も含む)。これらの鳥類について、佐渡島に生息あるいは飛来する個体数(推定)や近年の生息状況、さらに、環境省と新潟県のレッドリストの指定状況も考慮して、佐渡市レッドリスト種の選定を行いました。佐渡島に 1 年中生息する留鳥、佐渡島と他の地域を定期的に行き来する夏鳥や冬鳥に加えて、渡りの途中に立ち寄る旅鳥を主な対象としました。ごく稀にしか佐渡島に飛来しない迷鳥は対象から除きましたが、数年に 1 度は記録される旅鳥は対象に含めました。佐渡島で繁殖する鳥類については繁殖期の生息状況をもとに選定していますが、佐渡島を通過する旅鳥の場合、基本的には環境省レッドリストのカテゴリーを採用しています。その結果、トキやサドカケスなどの 79 種(亜種を含む)が選定されました。内訳は、絶滅危惧 IA 類(CR) 8 種、絶滅危惧 IB 類(EN) 11 種、絶滅危惧 II 類(VU) 26 種、地域個体群(LP) 3 種、準絶滅危惧 31 種(NT)です。多くの種が選定されていますが、佐渡島を定期的、あるいは、不定期に通過する旅鳥が多いのが特徴です。

(執筆者: 永田 尚志)

## (2-1) トキ *Nipponia nippon* (Temminck, 1835)

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 ペリカン目 トキ科		<b>CR</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 I A類 〈CR〉		
○ 環境省RL：〈CR〉	○ 新潟県RL：〈EN〉	○ 特別天然記念物

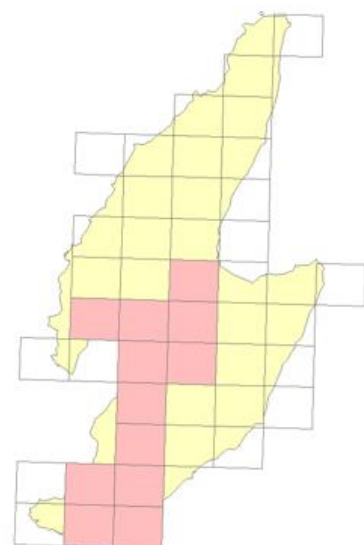
《特徴・生態》 全長 70～80 cm、翼開長 120cm、体重 1.5kg(♀)、1.8kg (♂)。顕著な性的二型はないが、雄のほうが雌より大きい。野外でつがいの 2 羽を比べてみると雌雄を判別できるが、単独では難しい。嘴は黒色で長く下に湾曲し先端が赤い。顔には羽毛がなく、朱色の皮膚が露出し、幼鳥は赤味が少ない。脚は頭部より薄い朱色であり、飛翔時には、尾羽より突出していない。繁殖期には、頸部の皮膚が黒くなり、首を使って皮膚から剥がれた黒色の脂質を塗りつけて上半身が黒灰色になります。林縁や山中の高木に営巣し、水田や畦、水田の近くの草地でドジョウ、カエル、ミミズ、昆虫類等、小動物を採餌します。一夫一妻で繁殖し、3月～7月に里山の樹上に営巣し、非繁殖期には群れで生活します。

《生息状況》 北東アジア特産種で、かつては、日本、台湾、中国、朝鮮半島、ロシア沿海州（ウスリー地方）の広い地域に分布していました。2008年から佐渡島で再導入が開始され、2020年10月までに397個体が放鳥されました。野外では、佐渡島に442羽が生息していると推定されています。内訳は、放鳥個体が165羽、野生下で生まれた個体277羽と推定されています（2021年2月末現在）。動植物調査では12メッシュで生息を確認しました。現在は、外海府、前浜にも分布を広げています。

《保全（減少要因）》 1940年代に隠岐、能登半島、佐渡島に100羽程度残っていましたが、1960年代には能登と佐渡に10羽程度が生息するまでに減少しました。飼育下で増殖し個体数を回復するために、1981年に佐渡島に生息していた最後の5羽を捕獲し、野生個体群は絶滅しました。トキの減少の原因は、明治期の狩猟解禁で激減し、太平洋戦争中の里山の伐採による営巣地が消失し、戦後の開発・農薬の使用が追い打ちをかけたと考えられています。日本産トキは2003年にキンが死亡し絶えましたが、中国からきた5羽をファウンダーとするトキの飼育下増殖は順調に進み、2008年から佐渡島で再導入事業が開始され、2020年10月までに23回の放鳥で397個体が放鳥されました。ただし、最新のIUCN基準では孫世代を残していない放鳥個体は成熟個体数に含めることができないため、まだ絶滅危惧 IA 類 (CR) の状況を脱しているとはいえません。



トキの繁殖羽（写真：永田 尚志）



動植物調査 H24-H26 より

（執筆者：永田 尚志）

(2-2) ハクガン *Anser caerulescens* Linnaeus, 1758

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 カモ目 カモ科	<b>CR</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 I A類 <CR>	
○ 環境省RL：<CR>      ○ 新潟県RL：<VU>	

(2-3) カリガネ *Anser erythropus* Linnaeus, 1758

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 カモ目 カモ科	<b>EN</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 I B類 <EN>	
○ 環境省RL：<EN>      ○ 新潟県RL：<NT>	

(2-4) ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* Latham, 1787

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 カモ目 カモ科	<b>VU</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 II類 <VU>	
○ 環境省RL：<VU>      ○ 新潟県RL：<NT>      ○ 天然記念物	

(2-5) オオヒシクイ *Anser fabalis middendorffii* Severtzov, 1873

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 カモ目 カモ科	<b>NT</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：準絶滅危惧 <NT>	
○ 環境省RL：<NT>      ○ 新潟県RL：<NT>      ○ 天然記念物	

(2-6) マガン *Anser albifrons* Scopoli, 1769

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 カモ目 カモ科	<b>NT</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：準絶滅危惧 <NT>	
○ 環境省RL：<NT>      ○ 新潟県RL：<NT>      ○ 天然記念物	

《特徴・生態》 ガン類は大型の水鳥で、シベリアで繁殖し日本列島で越冬します。越冬地では基本的に群れで生活し、特にマガンは数十羽が集合して「雁行」と呼ばれる編隊で移動することが多いです。ねぐらとなる湖沼や海と、採餌できる広い農地のある地域に棲み、日中は水田の落ちモミや雑草などを食べます。ハクガンは白色が目立ち、他のガン類に混じっていることが多いです。カリガネとマガンはともに灰褐色の体羽と白い額が特徴ですが、カリガネでは目の周りが黄色いアイリングになっているのが識別ポイントです。ガン類の中でも体が大きく、頭部が暗色を帯びている種がヒシクイ (*Anser fabalis*) で、亜種ヒシクイ (*Anser fabalis serrirostris*) と、より大型の亜種オオヒシクイ (*Anser fabalis middendorffii*) の2亜種が佐渡島に飛来します。

《生息状況》 マガンは例年数十羽が佐渡島で越冬し、ヒシクイとオオヒシクイもマガンの群れに混じって越冬することがあります。ハクガンとカリガネは稀に佐渡島で越冬します。これらのガン類は、主に国中平野の農地で見られます。

《保全（減少要因）》 一時期狩猟で減少したガン類の多くは、20世紀後半から保護策が講じられた結果、徐々に増加しています。マガンの越冬個体数は、全国的には増加しているものの、国中平野の個体数は近年減少傾向にあります。ガン類の越冬にとって水田耕作の継続が重要です。移動ルート上に洋上風力発電所が建設されると、衝突死（バードストライク）のリスクもありますが、越冬地を放棄する場合があります。



(左上) マガンの群れとともに行動するハクガン

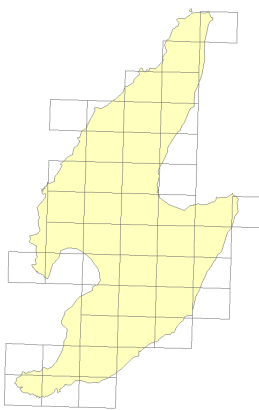
(右上) カリガネ

(左中) ヒシクイ

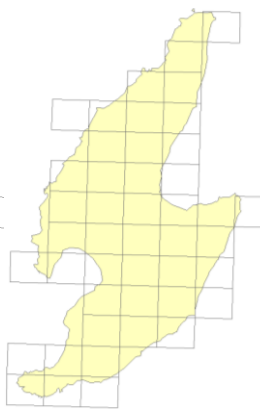
(右中) オオヒシクイ

(下) マガン

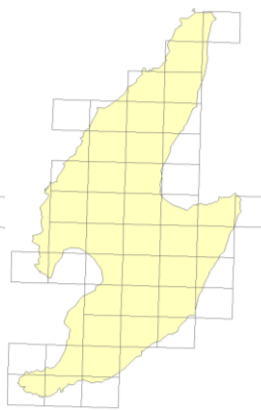
(写真：カリガネは近藤健一郎、他は中津弘)



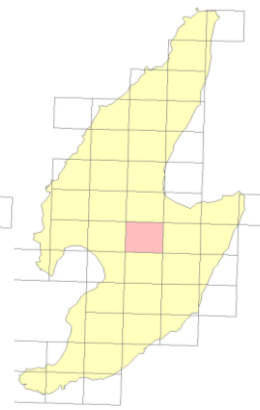
ハクガン



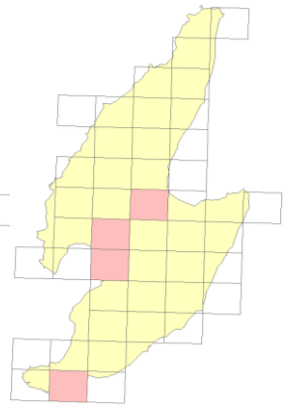
カリガネ



ヒシクイ



オオヒシクイ



マガン

動植物調査 H24-H26 より

(執筆者：中津 弘)



(2-7) シロチドリ *Charadrius alexandrinus* Linnaeus, 1758

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 チドリ目 チドリ科	<b>VU</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 II 類 (VU)	
○ 環境省RL：(VU)      ○ 新潟県RL：(NT)	

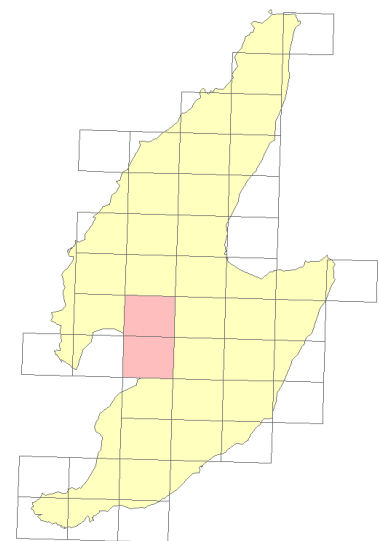
《特徴・生態》 全長 17cm と、スズメより少し大きなチドリ類で、上面は淡い褐色、下面は白色です。砂浜を歩き回って、ゴカイ類や甲殻類、昆虫類などを捕食します。砂地に簡単な巣を造って卵を産みまます。雛は孵化後まもなく親について歩くようになります。卵や雛の近くに人や犬が接近すると、親鳥は、怪我をしたような動きで外敵の目を逸らす、いわゆる擬傷行動をとる場合があります。

《生息状況》 佐渡島では砂浜海岸に生息する留鳥です。真野湾岸などでの繁殖が知られています。動植物調査では、真野湾沿いの砂浜でのみ観察されました。島内では近年減少しつつあります。シロチドリが生息できる砂浜は佐渡では限られます。これは、佐渡では急峻な地形が海面に潜り込む海岸線が多いため、岩礁が発達した磯海岸が卓越していること、土砂供給量が少ない小河川が多い島内では、砂浜海岸自体が形成されにくいことが関わっているでしょう。

《保全（減少要因）》 全国的に減少傾向にあります。国府川などの河川の上流部でのダム建設によって土砂供給量が減少すると、シロチドリが利用する砂浜海岸が縮小していく危険性があります。埋め立て工事による砂浜海岸の改変もマイナスの要素です。また、砂浜への車両の乗り入れ、人の進入が繰り返されると、シロチドリの繁殖に影響を及ぼすことがあります。



シロチドリ (写真：中津 弘)



動植物調査 H24-H26 より

(執筆者：中津 弘)

(2-8) コシャクシギ *Numenius minutus* Gould, 1841

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 チドリ目 シギ科	<b>EN</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 IB 類 (EN)	
○ 環境省 R L：(EN)      ○ 新潟県 R L：指定なし	

(2-9) セイタカシギ *Himantopus himantopus* Linnaeus, 1758

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 チドリ目 セイタカシギ科	<b>VU</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 II 類 (VU)	
○ 環境省 R L：(VU)      ○ 新潟県 R L：(NT)	

(2-10) オオソリハシシギ *Limosa lapponica* Linnaeus, 1758

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 チドリ目 シギ科	<b>VU</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 II 類 (VU)	
○ 環境省 R L：(VU)      ○ 新潟県 R L：(NT)	

(2-11) タカブシギ *Tringa glareola* Linnaeus, 1758

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 チドリ目 シギ科	<b>VU</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 II 類 (VU)	
○ 環境省 R L：(VU)      ○ 新潟県 R L：(NT)	

《特徴・生態》 シギ類は水辺とのつながりが深い鳥類です。多くが旅鳥で、北方の繁殖地と南方の越冬地の間を行き来する渡りの途中に日本列島を通過します。コシャクシギは全長 30cm でハトより少し小さく、地表面の餌を捕ります。セイタカシギは全長 37cm、不釣り合いに長い赤い脚で水辺を歩き回って餌を探します。オオソリハシシギは全長 39cm とハトくらいの大きさで、上に反った長い嘴をうまく使って泥や水の中を探り、小動物を捕食します。タカブシギはスズメより少し大きく、全長 20cm です。その名にあるように、タカの斑点模様（鷹斑）のようなきめ細かな羽をまとっていて、水辺で採餌します。

《生息状況》 これらのシギ類はいずれも、長距離の渡りの休息地・エネルギー補給地として佐渡に立ち寄り、海岸や農地を利用します。オオソリハシシギは海岸部の干潟や水田に現れて採餌し、コシャクシギは草地や水田の畦などに飛来して餌を探します。タカブシギは比較的多く見られ、動植物調査では、国中平野と羽茂平野の水田で繰り返し観察されました。セイタカシギは水田や河川などに飛来します。タカブシギとセイタカシギは、水を張った水田で採餌していることが多いです。

《保全（減少要因）》 佐渡では、河口部に土砂が堆積してできた干潟は限られています。干潟が埋め立てによって改変されたり、河川上流部のダム建設による土砂供給の減少で縮小したりすると、干潟に多く棲むゴカイ類や貝類を食べるオオソリハシシギにはマイナスに作用します。セイタカシギやタカブシギにとっては、渡り時期の農地が採餌に利用できる状態にあることが重要です。北へ向かう 4、5 月には水田が、南へ戻る 8、9 月には多くないものの、調整水田や水田ビオトープが、それぞれ湛水管理されていると、渡り途中の補給には打ってつけです。環境保全型農法も、餌動物を増やすことでシギ類にはプラスに働いているでしょう。草丈を短く管理した畦の存在は、地上を歩き回って採餌する小型のコシャクシギにとって好都合です。耕作放棄の増加や農法の変化は、これらのシギ類に影響を及ぼすと考えられます。長距離を渡るシギ類にとっては、中継地に質の良い餌場があることは重要です。



コシャクシギ



セイタカシギ

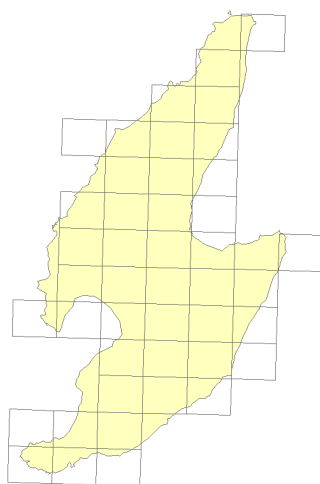


オオソリハシシギ（嘴が上に反る）とチュウシャクシギ（嘴が下に湾曲する）の大群

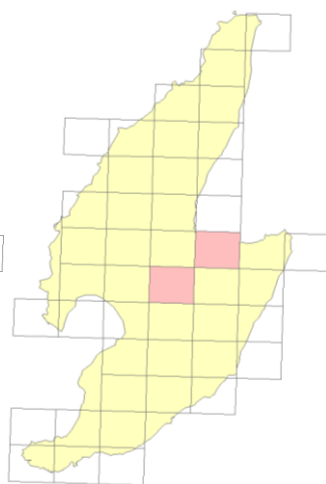


タカブシギの小群

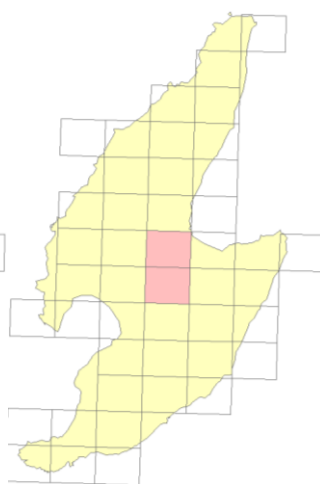
(写真：中津 弘)



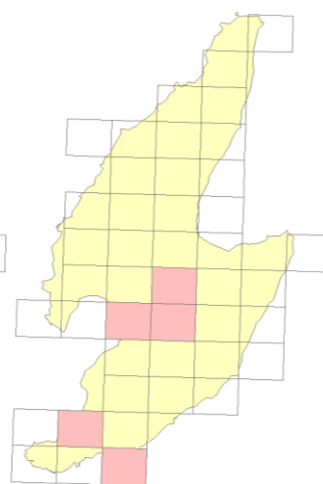
コシャクシギ



セイタカシギ



オオソリハシシギ



タカブシギ

動植物調査 H24-H26 より

(執筆：中津 弘)

(2-12) ウミスズメ *Synthliboramphus antiquus* Gmelin, 1789

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 チドリ目 ウミスズメ科	<b>CR</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 I A類 <CR>	
○ 環境省RL：<CR>      ○ 新潟県RL：<NT>	

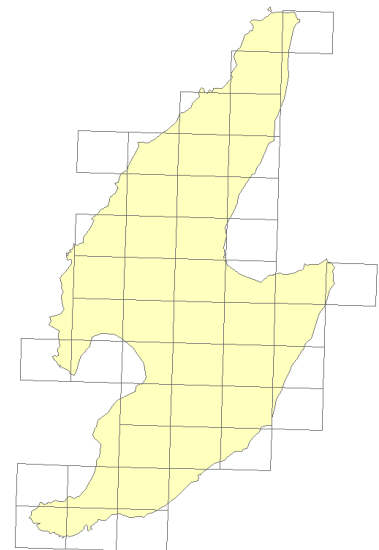
《特徴・生態》 全長 25cm とハトより少し小さく、ずんぐりした体形の小型の海鳥で、頭部から上面にかけては黒っぽい色彩をしています。「スズメ」と付きますが、チドリ目に分類される、スズメとは全く別系統の種です。国内では北日本の離島で少数が繁殖し、日本列島沿岸の海上で越冬します。海が荒れた時には港湾などに入ってくることもありますが、繁殖期以外は沖合の海上に浮遊して生活するため、なかなか観察機会はありません。条件が良ければ、航路で出会う場合があります。水中に潜って、短い翼を利用して泳ぎ回り、オキアミ類や小魚などを捕食します。

《生息状況》 佐渡島では、真野湾や両津湾で観察されている冬鳥です。観察が困難であることから、生息状況を知る上では情報が不足していますが、人目につかずに、少数が海岸線から数 km 程度の範囲に生息していると考えられます。

《保全（減少要因）》 1997 年 1 月に日本海でロシア船籍のタンカーのナホトカ号から大量の重油が流出した事故では、多くのウミスズメが油汚染で死亡しました。また、ウミスズメ類では、海中のプラスチックごみを餌と間違えて飲み込んだと考えられるケースが報告されています。このような海洋汚染の影響には注意を払う必要があります。また、漁網で混獲される場合もあり、配慮が求められます。



海上で群れるウミスズメ（写真：土屋 正起）



動植物調査 H24-H26 より

（執筆者：中津 弘）

(2-13) ハヤブサ *Falco peregrinus japonensis* J. F. Gmelin, 1788

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 ハヤブサ目 ハヤブサ科		<b>VU</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 II 類 (VU)		
○ 環境省 R L：(VU)	○ 新潟県 R L：(NT)	○ 国内希少野生動植物種

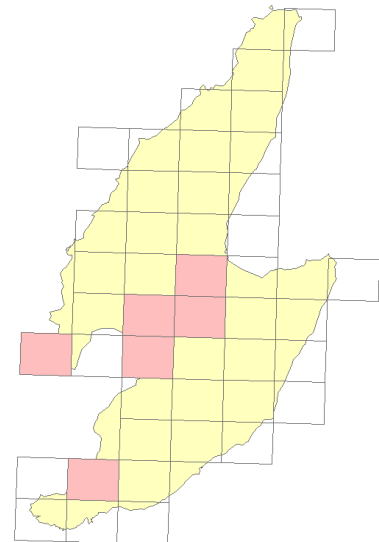
《特徴・生態》 全長は雄が 42cm、雌が 49cm と、カラスよりやや小型の猛禽類で、飛翔時に翼の先端がとがって見えるのが特徴です。上面の色彩は成鳥では暗い灰色、幼鳥では暗い褐色で、胸部から腹部には、成鳥ではきめ細かい横縞、幼鳥では粗い縦縞があります。上空から時には時速 300km の高速で急降下し、ヒヨドリやハト類、時にはカモ類などの鳥類を捕食します。繁殖ペアは縄張りを作り、崖地のくぼみに営巣します。都市に進出したペアでは、高層ビルのベランダなどで営巣し、ドバトを餌にする場合もあります。鉄塔や電柱に止まって餌を探しているのを観察できます。

《生息状況》 佐渡島では 1 年中見られる留鳥で、海岸部で少数が繁殖しています。秋や冬には、独立した幼鳥や繁殖を終えた成鳥が国中平野のような内陸部にも現れます。佐渡の海岸部の断崖は営巣場所に適しているだけでなく、子育てをする 4~5 月には、近辺を多くの渡り鳥が通過していくため、繁殖に好都合だと考えられます。動植物調査では、6 メッシュで記録されています。

《保全（減少要因）》 欧米では、1950~1960 年代の有機塩素系農薬（DDT など）の使用の影響で、ハヤブサの卵の殻が薄くなり壊れやすくなったことで繁殖成功率が低下し、加えて成鳥の中毒死も起こったため、本種の個体数が激減したことが報告されています。日本国内においても同様の状況が起こっていた可能性があります。ハヤブサの個体数についてのデータが残っていません。現在では、国内でも有機塩素系農薬の利用は禁止または大きな制限を受けています。佐渡島では、営巣地である崖地の改変、巣への人の接近、および渡り鳥の減少が、ハヤブサの繁殖に悪影響を与える危険性があります。



ハヤブサの幼鳥（写真：中津 弘）



動植物調査 H24-H26 よ

（執筆者：中津 弘）

(2-14) コジュリン *Emberiza yessoensis yessoensis* (Swinhoe, 1874)

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 スズメ目 ホオジロ科	<b>EN</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 I B類 〈EN〉	
○ 環境省RL：〈VU〉      ○ 新潟県RL：〈VU〉	

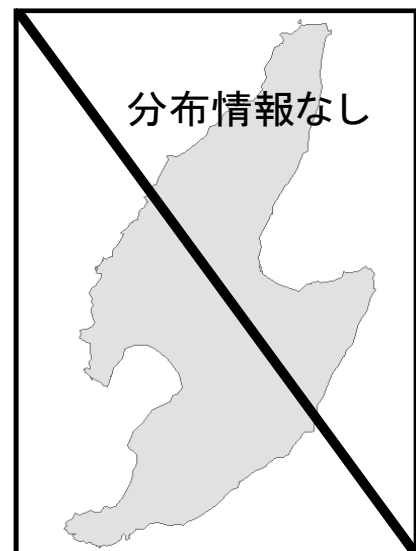
《特徴・生態》 スズメより小さく、全長 15cm、体重 14～16g です。夏羽の雄は頭部と喉が黒色で、後頭部から胸横は赤茶色、胸と腹は淡灰褐色、背と腰は赤褐色で、背中には黒い縦斑があります。雌の背面は雄に似ていますが、頭部は黒褐色で、眉斑と頬線は黄土色、喉は白くて黒い顎線があり、胸と脇は淡褐色で、腹は白くなります。雄の冬羽は雌に似ています。草丈の高い草原は避けて、ヨシがまばらで草丈が低く、単子葉植物の下層植生が発達している環境を好んで生息します。繁殖期の雄は、丈の高い植生の上部にとまり縄張り宣言のためさえざります。

《生息状況》 関東地方の個体群は留鳥ですが、北日本（青森県、秋田県、新潟県）の個体群は夏鳥として繁殖し、関東以南から西日本の地域で越冬します。新潟県では福島潟周辺に繁殖個体群があり、佐渡島では 2001 年から 2010 年にかけて、金井・佐和田地区でごく少数の個体が繁殖していましたが、現在では繁殖していません。しかし、日本海岸を渡る個体群が存在するため、ごく少数の個体が旅鳥として通過している可能性があります。

《保全（減少要因）》 コジュリンは、水田の耕作放棄後の短い時期に生じるヨシやヒメガマなどが侵入していないか、それらが疎らな草丈の低い草原好みます。ヨシ原のような草丈の高い植生に遷移し好適な生息環境が消失したため、佐渡島の個体群は消滅したと考えられます。佐渡島を通過する個体がいる可能性があるため好適な環境が出現すれば繁殖個体群が復活する可能性はあります。しかし、繁殖個体群の定着には、20 つがい以上が生息可能な広い面積(10ha 以上)の好適な草原が必要となります。



コジュリン♂ (写真：土屋 正起)



動植物調査 H24-H26 より

(執筆者：永田 尚志)

## (2-15) サドカケス *Garrulus glandarius tokugawae* Taka-Tsukasa, 1931

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 スズメ目 カラス科

LP

◎ 佐渡市レッドリスト：地域個体群〈LP〉

○ 環境省RL：指定なし

○ 新潟県RL：〈LP〉

○ 固有亜種

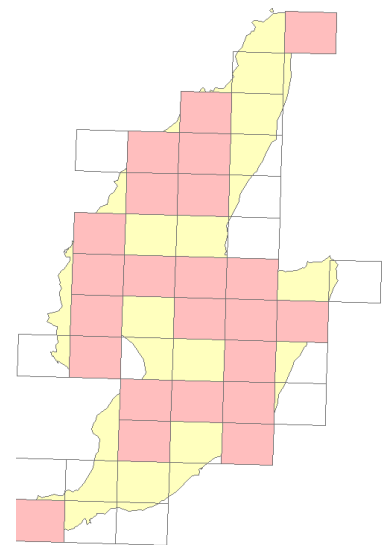
《特徴・生態》 全長 33cm 程度でハトくらいのサイズの、カラスの仲間です。全身は褐色を帯びていますが、頭頂部の白色、目元の黒色、翼の上面外側の青色が特徴的です。「ジェーッ」という濁った声で鳴きます。昆虫類などの小動物から樹木の種子まで食べる雑食性で、ドングリなどの木の実を貯蔵する習性があります。樹上で営巣します。カケス (*Garrulus glandarius*) という種は、国内では北海道から九州まで広く分布しますが、佐渡に棲むものは固有亜種サドカケスとされます。本州のカケスとは交流せず長期にわたって世代を継いだ結果、遺伝的に異なるグループになったと考えられます。

《生息状況》 大佐渡山地と小佐渡丘陵のまとまった森林地帯に生息する留鳥です。秋冬には一部が平野に飛来し、民家の屋敷林や果樹園などでも見られることがあります。動植物調査でも、鷺崎から宿根木に至るまで、島内各地の様々な林で生息を確認することができ、特に大佐渡山地・小佐渡丘陵で多く出現しました。

《保全（減少要因）》 サドカケスは島内に広く生息しており、生息地の森林が縮小するリスクはありません。今のところ脅威となる要素は見受けられませんが、佐渡島に固有な亜種の個体群として、今後も注意しておく必要があります。



カケスの成鳥（写真：中津 弘）



動植物調査 H24-H26 より

（執筆者：中津 弘）

(2-16) コルリ *Luscinia cyane* Pallas, 1776

分類：動物界 脊索動物門 鳥綱 スズメ目 ヒタキ科	<b>NT</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：準絶滅危惧〈NT〉	
○ 環境省RL：指定なし      ○ 新潟県RL：指定なし	

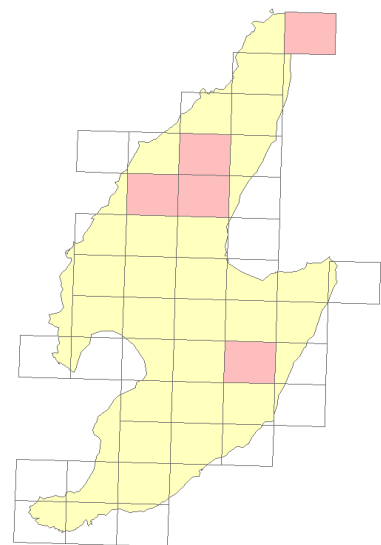
《特徴・生態》 全長 14cm で、スズメくらいの大きさの小鳥です。雄は頭部から上面が美しい青色、雌はオリーブ褐色の羽を持っています。森林に棲み、地表面付近で昆虫類などを捕食し、地上に巣を造ります。茂みに潜むのが上手なので、声を聞くことはあっても、なかなか目で見ることができません。

《生息状況》 佐渡には夏鳥として渡来し、大佐渡山地の中腹以上の森林で繁殖します。渡りの時期には、他の場所でも観察されることがあります。動植物調査では、ドンデン山のブナ林と小田・石名のスギ林付近で繰り返し確認されました。他に、鷺崎と小佐渡丘陵でも鳴き声が聞かれましたが、これらは5月下旬の確認であり、渡り途中の個体の可能性があります。いずれにせよ、島内でも生息する場所は限定的と考えられます。国内でコルリが繁殖している離島は、佐渡島と南千島のみとされます。長い時間をかけて隆起し、豊かな森林に覆われるようになった大佐渡山地にいつからコルリが渡来するようになったのか、生物と生息地の関係を考える上でも興味深い事例です。

《保全（減少要因）》 コルリが生息しているのはパッチ状の限られた範囲であり、高標高地が主体となっていることから、気候変動や環境改変の影響を受けやすいと考えられます。仮に温暖化による森林の変化によって、コルリの生息可能な環境がより高標高へと移動した場合、大佐渡山地の脊梁部にかけて徐々にその島状の生息地の範囲は狭くなっていくと推察されます。



下層植生にとまるコルリ♂ (写真：近藤 健一郎)



動植物調査 H24-H26 より

(執筆：中津 弘)



## 3 両生類・爬虫類

### 両生類

(3-1) サドガエル *Glandirana susurra* 〈EN〉

(3-2) アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster* 〈NT〉

### 爬虫類

(3-3) シロマダラ *Lycodon orientalis* 〈LP〉

#### 【選定方法】

佐渡市の両生類・爬虫類（海産種を除く）は、動植物調査（平成24～26年度）で全域の調査を行い直接確認した種と、文献や聞き取り調査から確認した爬虫類1種をあわせて、両生類9種、爬虫類12種を対象としました。このなかから島外外来種を除き、生息状況、環境省と新潟県のレッドリストの指定状況を考慮して、佐渡市レッドリスト種の選定を行い、サドガエルやシロマダラなど4種が選定されました。内訳は、絶滅危惧IB類(EN)1種、準絶滅危惧種(NT)1種、地域個体群(LP)1種、情報不足1種(DD)です。DDのニホンイシガメは、平野部からの数少ない情報しか得られず、過去の文献記録と合わせて判断すると、人為的に島内に持ち込まれた個体およびその子孫（クサガメとの交雑種含む）が散発的にみつかっている可能性があります。また、今回リストに掲載されなかった種についても、水田やため池を利用する両生類、およびそれらを餌にするヘビ類を中心に、圃場整備や耕作放棄などの生息環境の変化、農薬使用や外来種による捕食により以前と比べて減少傾向にある種は多いと考えられます。

（執筆者：小林 頼太）

(3-1) サドガエル *Glandirana susurra* Sekiya, Miura et Ogata, 2012

分類：動物界 脊索動物門 両生綱 無尾目 アカガエル科		<b>EN</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：絶滅危惧 I B類 〈EN〉		
○ 環境省RL：〈EN〉	○ 新潟県RL：〈NT〉	
○ 2012年に新種記載がなされた佐渡島の固有種		

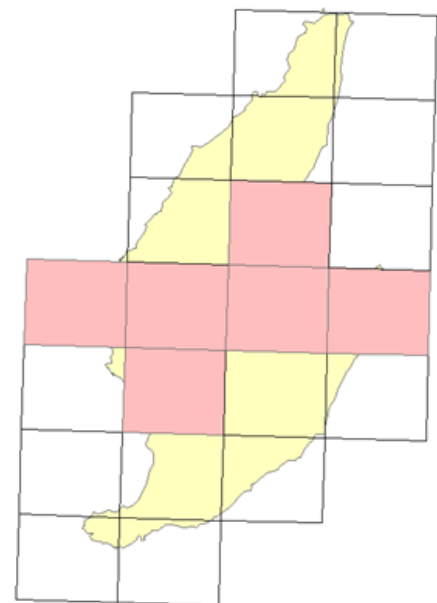
《特徴・生態》 水環境に強く依存する種で、水場から遠くに離れることがほとんどありません。用心深い種で、鳴のうを持たない鳴声は、低く連続的で虫の声と間違えられることがあります。5月中旬頃から夏場にかけて小型の卵を産卵し、数日後には孵化しますが、幼生期は長く次の年の夏に変態し上陸します。

《生息状況》 成体はともかく越冬するサドガエルの幼生は、ヒトが考え出してきた溜池と水田の水環境をうまく活用してきました。近年は、この水環境の構造や管理法が変わり、安定した繁殖が非常に難しくなってきました。

《保全（減少要因）》 減少する古い溜池には、外来種のウシガエルや魚類が多く繁殖するようになり、これらの対策が必要です。溜池の貯水は、水田に全てを送らないで一部を残すと幼生を分散させることができます。水田では水抜き乾燥などの管理方法に対応して、水場の代替となる避難場所の工夫がなされ、また、圃場整備に組み込まれる新しい計画も進められています。農薬や化学肥料の使用を減らし、付加価値をつける安全な米作りは、水環境保全の良い見本になっています。



水環境を好む成体（写真：関谷 國男）



動植物調査 H24-H26 より  
(10km メッシュ)

(執筆：関谷 國男)

### (3-2) アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster* Boie, 1826

分類：動物界 脊索動物門 両生綱 有尾目 イモリ科	<b>NT</b>
◎ 佐渡市レッドリスト：準絶滅危惧〈NT〉	
○ 環境省RL：〈NT〉      ○ 新潟県RL：〈NT〉	

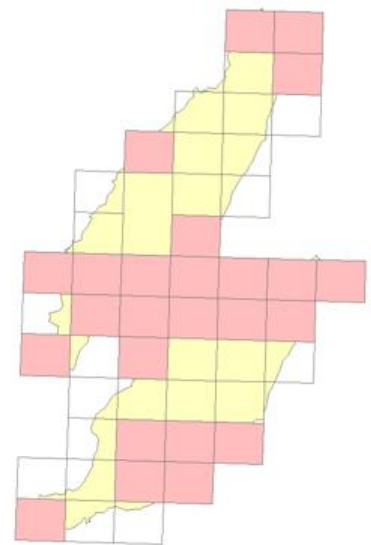
《特徴・生態》 全長は8～13cm。背面は黒色から褐色。腹面は赤やオレンジ色で黒斑模様があるのが特徴です。佐渡では腹面の赤色の面積が小さくほとんど黒い集団もいます。皮膚はざらざらして、成体は1年中水の中にいます。繁殖期のオスの尾は紫色を帯びます。体内受精でメスは卵を1つずつ水草や水中の落ち葉などに包んで産みます。フグと同じ毒を持ちますが、トキは餌として利用することが知られます。

《生息状況》 平野部から山間部のため池や江、小水路などの湿地に生息し、初夏にはしばしば水田にも現れます。動植物調査では、全島からみられ、25メッシュで記録されました。

《保全（減少要因）》 ひと昔まえの水田は繁殖に好都合でしたが、生息できる場所が限定されてきています。圃場整備などの生息地の改変、水田の耕作放棄やため池の消失などが生息地の減少につながります。農薬使用や水質汚濁も減少要因と考えられます。



アカハライモリ（写真：小林 頼太）



動植物調査 H24-H26 より

（執筆者：小林 頼太）

### (3-3) シロマダラ *Lycodon orientalis* Hilgendorf, 1880

分類：動物界 脊索動物門 爬虫綱 有鱗目 ナミヘビ科

LP

◎ 佐渡市レッドリスト：地域個体群〈LP〉

○ 環境省RL：指定なし

○ 新潟県RL：〈LP〉

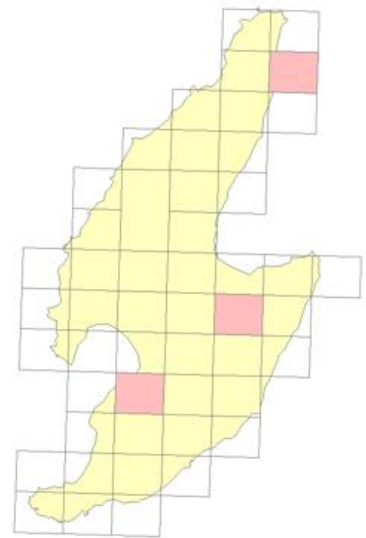
《特徴・生態》 全長は30～70cm。地色は灰色から茶褐色で黒い横帯が入ります。幼蛇はコントラストがはっきりし、目の後ろに一对の白い斑紋があります。夜行性で、日中は石垣の間や倒木、石の下などに隠れており、人目につきません。主な食性はトカゲ類や小型のヘビなどの爬虫類。気性が荒く、怒ると上体を持ち上げて咬み付く行動をとります。毒はありません。

《生息状況》 平地から山地に生息し、住宅地周辺で発見されることもあります。動植物調査では、内海府北部から国中平野周辺の3メッシュから5個体が確認されました。相川や金井、赤泊地域からも記録例があり、島内に広く生息しているものの、密度は低いとみられます。

《保全（減少要因）》 山地の森林伐採、林道建設などの開発や土地利用の変化は、本種および餌生物の生息環境の悪化に影響する可能性があります。



シロマダラ（写真：小林 頼太）



動植物調査 H24-H26 より

（執筆者：小林 頼太）